



和's YAMATO (わずやまと)

2026
初春号

● 写真で楽しむ美しい自然 「白鳥と富士山」

● YAMATO TOPICS

・関東学院大学ラグビー部リーグ戦1部で奮闘
・群馬グリーンウィングス ヤマトスペシャルマッチを開催

● 群馬の芸術家 坂本幸重

● 郷土史跡めぐり 金井遺跡群(群馬県渋川市)

● 葛谷重三郎の卓越した手腕

・伊勢長島一向一揆の鎮圧

・姉川の戦い

・朝倉氏・浅井氏討伐

・墨俣(すのまた)の一夜城

・美濃地域の攻略

■ 信長、秀吉、秀長の主な合戦

■ 秀吉の家臣となった秀長

■ 秀吉は信長に仕えて武将となる

● 豊臣秀長 秀吉の活躍を影で支えた知将



「早春の声」紅梅とメジロ 須藤和之画



写真で楽しむ 美しい自然

『白鳥と富士山』 群馬県館林市・多々良沼より撮影

《撮影》藤重朋紀氏

略歴	1952	群馬県利根郡みなかみ町生まれ	2001	フリー
	1971	群馬県渋川高等学校卒業	2010	写真集「上州路・一本桜」
	1972	東京写真専門学校中退	2011	写真集「上州路」
	1979	コマーシャルフォトスタジオ創美社		



表紙の絵
「早春の声」紅梅とメジロ《F6号》

須藤 和之 プロフィール

Kazuyuki Sutoh Profile

1981年 群馬県前橋市生まれ
2005年 多摩美術大学絵画学科日本画専攻卒業 2007年 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻 保存修復日本画修了 2010年 同大学大学院 保存修復日本画博士課程修了 博士号取得 博士審査展 お仏壇のはせがわ 賞特別賞 個展(画廊翠樹)(同2011~25) 2011年 中央電機商会カレンダー原画(2011~25) 2013年 アーツ前橋開館記念展出品、群馬銀行創立80周年記念収蔵作品制作 2014年 個展(日本橋三越本店)(同2017,20,23) 2017年 群馬県展 県知事賞 2016年 個展(株式会社ヤマト)
2019年 高崎市タワー美術館トップランナーIII出品 2020年 上毛芸術文化賞受賞 2022年 個展(株式会社ヤマト)
2023年 群馬銀行創立90周年記念 収蔵作品制作 現在 日本美術院院友 群馬県美術会理事 慶應義塾大学非常勤講師(2013~25)
OFFICIAL WEBSITE:SUTOOO.NET URL <http://sutoooo.net/>



和's YAMATO わずやまと

2026年初春号(第67号)

《和's YAMATOの由来》ヤマトの漢字の「和」、Water & Airの頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。

和'sYAMATO初春号 2025年(令和7年)12月発行

発行:株式会社ヤマト広報室 群馬県前橋市古市町118 TEL.027-290-1891 FAX.027-290-1896

建設プロダクト ㊦ ヤマト

【発行】株式会社ヤマト 〒371-0844 群馬県前橋市古市町118 TEL:027-290-1800(代) FAX:027-290-1896

支店/東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北 営業所/軽井沢、伊勢崎、神奈川県央、茨城、太田、東松山、長野、渋川、川口、多摩、横須賀、青森
附属施設/大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、朝倉工場、教育センター、コンタクトセンター、サポートセンター、プロダクトセンター
ヤマトホームページ <https://www.yamato-se.co.jp/>



豊臣秀長



豊臣秀吉は織田信長に仕え、信長の後継者として天下統一を果たすが、秀吉を支える大きな存在として、弟の秀長の存在があり、軍事と政務の両面から兄の秀吉を支えた。合戦の際、秀長は副将格として軍列に加わり、戦後処理にあたっては、秀吉の補佐役としての能力を存分に発揮した。豊臣兄弟の力の結束が、天下統一という大事業を成しえたといえるだろう。

秀吉は信長に仕え武将となる

天文6年（1537）、秀吉は尾張国愛知郡中村で生まれたという。父は同村の百姓弥右衛門、母はなか（後の大政所）。姉のとも（後の日秀尼）が生まれていたが、弥右衛門が死去すると、なかは筑阿弥という人物と再婚し、秀長と後の朝日姫を産んだ。秀長は秀吉より3歳年下の同9年生まれで、朝日姫は6歳年下の12年生まれだった。

織田信長の家臣となるまでの秀吉について

ては、信頼できる資料が残っていないため不明だが、駿河今川氏の家臣で遠江国頭陀寺（すだじ）城主の松下加兵衛に仕えたという。松下家を去った後は信長に仕え、その草履取りを勤める。信長にとって人生の転機となる永禄3年（1560）の桶狭間の戦いには足輕の身分で出陣した。

秀吉が頭角を現わすのは、信長が尾張を平定し、続けて美濃の斎藤氏との戦いに突入してからである。織田方が最前線に築いた砦を任せられ、調略により斎藤方の武将を寝返らせた。伝説化している墨俣の一夜城

秀吉の家臣となった秀長

秀吉が織田家中で部下を率いる立場に出世した頃、秀長はその家臣となる。長男の秀吉が家を出たため、当時は次男秀長が跡取りとして中村で農作業に従事していた。もともと家臣がいなかった秀吉からすると、当時もつとも信頼を寄せていたのは肉親だった。そのため、血を分けた唯一の弟であ

る秀長に対し、自分を助けて欲しいと懇望する。秀長もこれに応え、秀吉の家臣となり、武士として生きる道を選ぶ。

永禄11年（1568）に上洛を果たした信長は、畿内平定のため各地を転戦する。元亀元年（1570）からは、北近江の戦国大名浅井長政と死闘を繰り返した。秀吉は浅井氏との戦いで、その最前線に立つ。天正元年（1573）9月に信長が浅井氏を滅ぼすと、秀吉はその旧領を与えられた。長浜城主として北近江三郡の12万石を治めることになる。

秀吉は12万石の領主となった時、浅井氏の旧臣などを大勢抱え入れたが、ナンバー2たる秀長の禄高は8500石だった。妻ねね（後の北政所）の実兄杉原（木下）家定や寧々の義弟浅野長政たちも、秀吉にとつては貴重な存在であり、一門衆が家臣団の中核となっていた。秀長自身が召し抱え、重用した家臣としては藤堂高虎たちが挙げられる。

秀長の幼名は小竹。通称は小一郎。おもな官位は権大納言・美濃守。大和・大納言とも呼ばれた。秀長は天正12年に「秀長」に改名し、それ以前は「長秀」と名乗っていた。混乱を避けるため、本稿では秀長に統一して表記した。

秀吉の活躍を影で支えた知将



豊臣秀吉画像【佐賀県重要文化財】
佐賀県立名護屋城博物館蔵

などはその象徴である。

同10年（1567）、信長は斎藤龍興の居城・稲葉山城を落とし、美濃を平定した。翌年には15代将軍となる足利義昭を擁して、南近江の六角氏の軍勢を駆逐し、そのまま京都に入る。この上洛戦には、秀吉も織田

信長、秀吉、秀長の主な合戦

美濃地域の攻略

織田信長の美濃攻略は、彼の天下統一への第一歩ともいえる重要な戦いだった。信長は尾張の小大名から頭角を現し、隣国・美濃（現在の岐阜県南部）を支配する斎藤氏を攻略することで勢力拡大を狙った。

美濃を治めていたのは「美濃のママシ」と呼ばれた斎藤道三だった。道三は信長の才を見抜き、自らの娘濃姫を嫁がせて同盟関係を築く。しかし弘治2年（1556）に道三が嫡子・義龍に討たれると、信長と斎藤氏との関係は悪化した。以後、信長は斎藤氏との間で十数年にわたる戦いを続けた。

信長は正面攻撃ではなく、調略による攻略を進めた。永禄7年（1564）頃から美濃国内の有力国人を味方につけ、内部からの崩壊を促す。決定打となったのは永禄10年の稲葉山城攻略である。斎藤氏を支えた西美濃三人衆の内応により、信長はついに稲葉山城を陥落させた。

信長はその城を「岐阜城」と改名し、「天下布武」の印を掲げる。これは戦国の群雄割拠を終わらせ、全国統一を目指す宣言だった。

墨俣（すのまた）の一夜城

織田信長の美濃攻略において、木下藤吉郎（のちの豊臣秀吉）は重要な役割を果たした。永禄9年頃、秀吉は美濃国墨俣に「一夜城」と呼ばれる砦を築いたと伝えられる。

実際には二夜で完成したわけではないが、事前に資材を用意し、短期間で城を建てた奇策として知られる。この砦は長良川を渡る拠点として機能し、斎藤氏の防衛線を突破する足掛かりとなった。秀吉の大胆な発想と実行力は信長に高く評価され、後の出世の契機となった。墨俣・夜城は、信長の美濃平定の象徴であると同時に、秀吉の才覚が初めて天下に示された出来事であった。

朝倉氏・浅井氏討伐

信長の朝倉氏・浅井氏討伐は、天下統一への過程で重要な転機となった戦いである。永禄11年（1568）、信長は足利義昭を奉じて上洛を果たし、近畿一円に勢力を拡大する。しかし、その後に対立したのが、越前

豊臣秀吉・秀長 関係年表

天文6年(1537)	2月	秀吉生まれる
天文9年(1540)		秀長生まれる
天文13年(1544)		父・弥右衛門死去
天文21年(1552)頃		秀吉が今川家家臣・松下家に仕え、木下藤吉郎と名乗る
天文23年(1554)頃		秀吉が織田信長に仕える
永禄9年(1566)		秀吉、「墨俣一夜城」を築く(諸説あり)
永禄11年(1568)	9月	信長上洛、秀吉が六角氏方の箕作城攻めで戦功をあげる
元亀元年(1570)	4月	秀吉、朝倉氏討伐の撤退の際に殿を務める(金ヶ崎の退き口)
元亀3年(1572)		秀吉、「木下」から「羽柴」に改姓
	9月	秀吉、浅井家の旧領北近江三郡を与えられ、長浜城主となる
天正2年(1574)	7月	秀長、信長馬廻として伊勢長島一向一揆攻略で先陣を務める
天正3年(1575)	5月	秀吉、「長篠の戦い」に従軍
天正5年(1577)	10月	秀長、但馬侵攻の総大将を務め、竹田城の城代となる
天正6年(1578)	3月	秀吉、三木城の攻略を開始
天正8年(1580)	1月	三木城城主・別所長治が降伏し切腹
	4～5月	秀吉、播磨・但馬両国を平定
天正9年(1581)	10月	秀吉、鳥取城を兵糧攻めし降伏させる
天正10年(1582)	3月	秀吉、備中に進軍し、秀長も従軍。高松城を包囲
	6月	本能寺の変。秀吉、山崎の合戦で明智光秀を破る
		清須会議の結果、秀吉の領土拡大
		秀長、丹波福知山を拝領
		秀長、嫡子・与一郎を亡くし、惟住長秀三男・千丸を養子とする
天正11年(1583)	4月	秀吉、賤ヶ岳の戦いで柴田勝家に勝利
	5月	秀吉が織田家諸将の領国分配・転封を行い、秀長は播磨・但馬の二ヶ国を拝領
天正12年(1584)	4月	秀長 伊勢松ヶ浜城を筒井順慶らと攻略
	11月	秀吉、小牧・長久手の戦いののち、織田信雄と和睦
		秀長、「長秀」から「秀長」に改名
		秀吉、従三位・権大納言となる
天正13年(1585)	3月	秀吉、正二位・内大臣に昇進し初参内
		秀長、紀州征伐ののち紀伊・和泉を拝領
	6月	秀長、総大将として四国に出陣
	7月	秀吉、従一位・関白となる
	閏8月	秀長、大和を拝領し郡山城に入る
	9月	秀吉、豊臣への改姓を許可される
	10月	秀長、参議・近衛中將になり参内
天正14年(1586)	5月	秀吉・秀長の妹・朝日(南明院殿) 家康に輿入れ
	4月～11月	大友宗麟、上杉景勝、徳川家康が上坂して秀吉に出仕、秀長が接待
	10月～11月	秀長、正三位・権中納言となる
天正15年(1587)	2月～4月	秀吉・秀長、九州へ出陣し、島津氏を降伏させる
天正16年(1588)	8月	秀長、従二位・権大納言となる



墨俣一夜城
大垣市墨俣歴史資料館 (岐阜県大垣市)

の朝倉義景と近江の浅井長政だった。

もともと浅井氏は信長と同盟関係にあり、長政は信長の妹お市を妻としていた。しかし、信長が旧来の盟友である朝倉氏を攻めたことで、浅井氏は義理と情に挟まれ、最終的に朝倉方に寝返る。これにより、信長は北近江で挟撃を受ける危機に陥ってしまう。

元亀元年(1570)、信長は退路を絶たれながらも機転を利かせ、秀吉らの活躍によって撤退に成功した。特に秀吉は殿(しんがり)を務め、後世に伝わる退却戦の「金ヶ崎の退き口(かねがさきののきぐち)」と称される巧みな防戦を展開し、信長の厚い信頼を得た。

次いで同年に起こった姉川の戦いで信長・

徳川連合軍は浅井・朝倉連合軍を撃破し、さらに、秀吉に預けた横山城を拠点に北近江攻略を進めた。天正元年(1573)には小谷城(おだにじょう)で浅井氏を滅ぼし、朝倉氏も越前・乗谷で滅亡する。

この連の戦いを通じて、秀吉は武勇と知略を発揮して頭角を現し、信長の天下布武を支える重要な家臣としての地位を確立していった。

姉川の戦い

元亀元年(1570)6月、近江国の姉川(あねがわ)流域で織田信長・徳川家康の連合軍と、浅井長政・朝倉義景の連合軍が激突した。川霧の立ち込める早朝、野村口(のむらぐち)では織田軍と浅井軍が、三田村口(みたむらぐち)では徳川軍と朝倉軍が向かい合った。半日にわたる激戦の末、徳川軍が突破に成功し、浅井軍が総崩れとなったことで勝敗が決した。秀吉は織田軍の一翼として参戦し、戦後、信長は琵琶湖の北側(湖北)の要衝・横山城(よこやまじょう)を掌握し、秀吉を城番(じょうばん・城の守備にあたる武将)として常駐させた。

横山城は浅井氏の本拠小谷城を包囲・圧迫する拠点として機能した。交通遮断線が築かれ、浅井氏の勢力は徐々に削がれていく。やがて天正元年(1573)の小谷城落城へとつながり、秀吉が長浜城を拠点として湖北を支配することになる。

伊勢長島一向一揆の鎮圧

元亀元年(1570)に起こった伊勢長島一向一揆は、織田信長にとって最大級の難敵となった一向宗門徒による反乱だった。

長島(現在の三重県北部)は伊勢湾に面した要地で、かねてより本願寺勢力の拠点として強固な防備が築かれた地で、伊勢でも一向宗勢力が蜂起し、織田方に反抗した。

信長は当初、武力で鎮圧を試みたが、

地形の複雑さと住民の徹底抗戦に苦しみ、第一次・第二次の攻撃はいずれも失敗に終わり、織田軍は大きな損害を受ける。しかし、信長は諦めず、天正2年(1574)に3度目の攻撃を決行する。

この攻撃に参加したのが、秀長だった。織田軍は水軍により海上からの補給を遮断し、長島を完全に孤立させる戦略を実行する。そして、堤防や堀を築いて包囲網を固め、徹底的な兵糧攻めを行い、逃げ場を失った一向一揆は衰弱し、最後には織田軍の総攻撃によって壊滅する。

秀長も参加した長島一向一揆の鎮圧は、信長の支配体制を強化する契機の一つとなったのである。



織田信長像
JR岐阜駅前

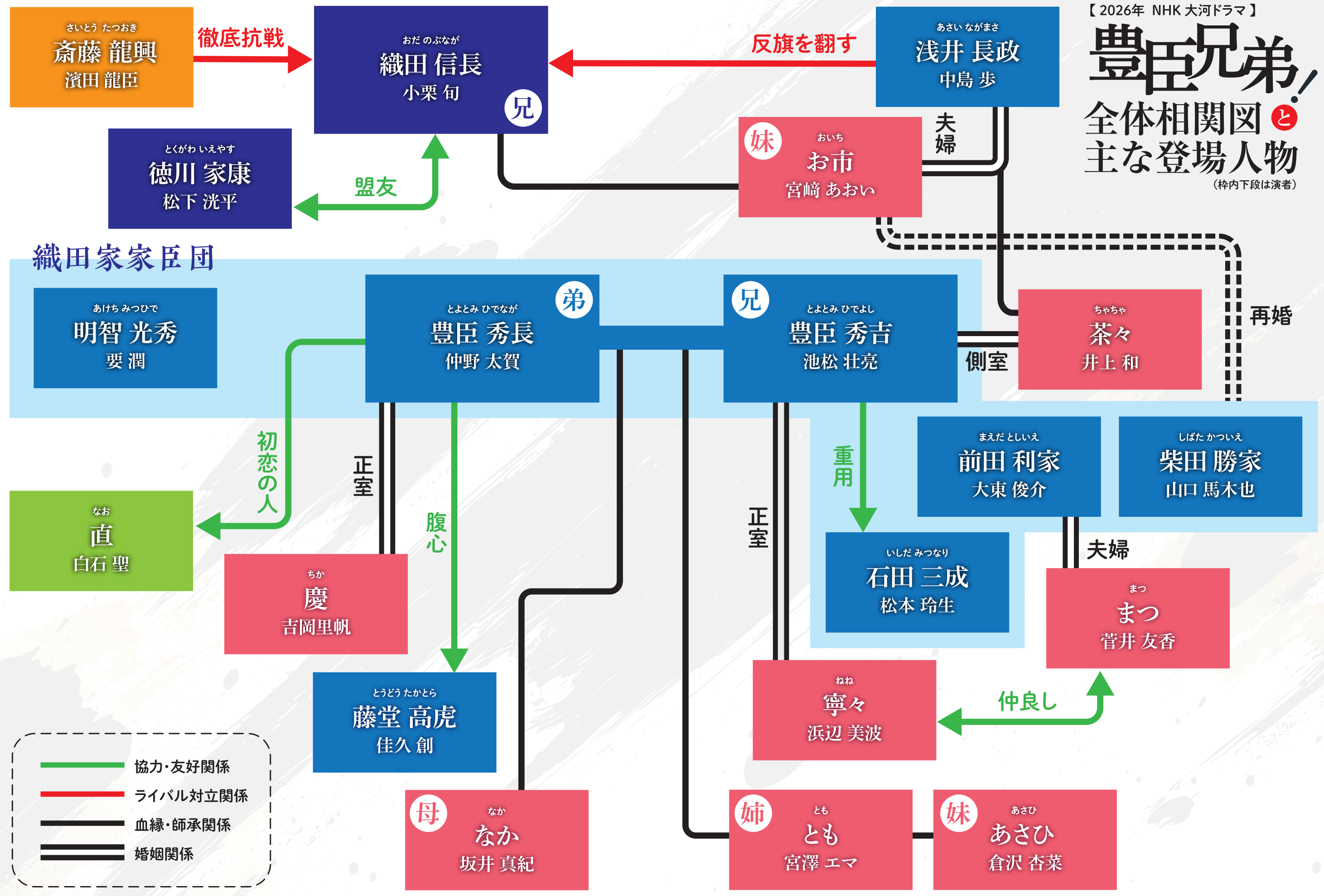
主要参考文献:『日本史の中の兄弟たち』安藤優一郎著
文:木下直也

【2026年 NHK 大河ドラマ】

豊臣兄弟!

全体相関図と
主な登場人物

(枠内下段は演者)



葛飾北斎、東洲斎写楽の才能を見出した「江戸のメディア王」

Tsutaya

Juzaburo

葛屋重三郎の卓越した手腕

葛屋重三郎は江戸時代の安永元年（1772）に、吉原で貸本屋を開業し、わずか10年ほどで江戸の出版界をリードする地位を固め、才能のある作家や絵師を発掘し、「江戸のメディア王」「江戸文化のプロデューサー」と称されるようになる。世襲による既得権益の継承が主流の時代に、一代での劇的な躍進の背景には、田沼意次による経済活性化策と社会の自由化がある。重三郎はその時流に乗って出版メディアの新たな企画を連発し、江戸文化をけん引したのだった。

北斎をプロデューサー

葛飾北斎は、宝暦10年（1760）に江戸本所割下水（えどほんじゃわりすい・現在の東京都墨田区本所周辺）で生まれ、幼少時から作画を好み、15歳の頃に版下彫り職人から木版を学ぶ。安永7年（1778）の19歳には浮世絵師の勝川春章に弟子入りし、勝川春朗（かつかわしゅんろう）を名乗り作家デビューした。葛屋重三郎は北斎の才能を見出し、武者絵「梶原源太景季（かじわらげんた

かげすえ）」を描かせ、耕書堂で発行する出版物の挿絵などに北斎の作品を使用した。

北斎は重三郎から得た仕事の中で、独自の表現を模索してその才能に磨きをかけた。重三郎が用意した仕事によって、北斎の才能が広く知れ渡ることになった。

北斎は絵画技法の習得にも熱心で、師の春章が死去した後は狩野派、土佐派、琳派の画風を学び、琳派の絵師・俵屋宗理の名跡を継いで二代目宗理を名乗り、絵画技術の研鑽に加え独自の画法を追い求めた。その一方、耕書

堂からは狂歌絵

本を刊行し、読本

の挿絵に注力するなど創作活動は多岐に渡った。

文化元年（18

04）～4年には曲亭馬琴の「新編水滸画伝（しんべんすいこがでん）」、「椿節弓張月（ち

んせつゆみはりづき）」、「柳亭種彦（りゅうていたねひこ）」の「阿波之鳴門（あわのなると）」などの挿絵を描き、代表作の一つとなる。晩年には版画や肉筆画の作品が増え、天保2年（1831）に代表作となる「富嶽三十六景」を発表するなど画業への意欲は衰えず、嘉永2年（1849）に90歳で没するまで、生涯に3万4千点を超える作品を発表した。

写楽の全作品を手がける

写楽は本名、生没年、絵を学んだ師匠などは不明だが、徳島藩のお抱え能役者・斎藤十郎兵衛とする説が有力とされている。写楽の活動期間は寛政6年（1794）5月から翌年1月までの10カ月に過ぎなかった。その間に発表した作品数は140点を越え、その9割以上が役者絵で、若干の相撲絵と武者絵を

描き、すべてが耕書堂から出版されている。

重三郎は寛政6年5～6月に28点もの役者絵を出版し、浮世絵の市場を写楽で占める作戦だった。作品にもいろいろな工夫が施され、貝殻の粉末を用いて重厚感を出す「黒雲母摺くろきらざり」の手法を用いた。こうした工夫が施された写楽の役者絵が出版されると、大きな反響を呼ぶ。注目すべきは、市川蝦蔵（五代目市川團十郎）のような人気役者も描かれたが、むしろ中堅や若手の役者を描いた役者絵の方が多かったことである。

デビュー直後の作品群は写楽の第一期と呼ばれる。それらは江戸三座（中村座、市村座、森田座）それぞれの興行に合わせる形で出版された。当時三座の経営は厳しく、客入りが寂しく活気がなかった現状を打開するためのテクニカルに迫られ、そこに写楽の浮世絵が投入されたのである。

役者絵の大量出

版には、歌舞伎への関心が高まる起爆剤となることへの期待が込められていた。中堅や若手の役者を描いた作品を数多く出版したことには、新た

なスター誕生への期待があった。

第二期にあたる同年七月から十月にかけても、写楽の役者絵が38点も出版される。第一期は大首絵で、第二期は全身像となっており、人気役者を描いたものが多かった。第一期との違いをはっきりさせることで、インパクトを出そうとしたのだろう。

その後も第3期、第4期と写楽の役者絵は出版されるが、その評価は徐々に下がっていった。その理由は、第一期の作品に見られたような個性が失われていたからだ。

写楽の特徴は、役者の顔を美化すること無く、ありのままの容姿を描くことにあった。それだからこそ、今までは無い迫真に迫る姿が一般には受けたのだが、描かれた役者やそのファンから反発を買ってしまう。リアルな描写は、強調されたくない部分も描かれるので、きれいに描いてもらいたいとの要望が出てもおかしくない。

役者やファンの意向に寸度してリアルさを抑制したことで、写楽の作品からは個性が失われてしまった。写楽自身創作意欲を欠き、デビューからわずか10カ月で浮世絵界から消えてしまう事態となる。

重三郎は、写楽を売り出すことで役者絵の市場を活性化させようとしたが、その目論見もわずか10カ月で潰えてしまったのである。



富嶽三十六景・御厩川岸より両国橋夕陽見 葛飾北斎 筆

（ふがくさんじゅうろっけい・おんまやがしよりょうごくばしゆうひみ）出典：ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)

重三郎は帰らぬ人に

重三郎は、寛政期の出版規制に抗いながら事業の維持拡大を図ったが、歌麿の美人画は規制の影響で売れ行きが落ち、写楽は10か月で姿を消し、浮世絵出版は行き詰まった。経営悪化は避けられず、寛政8年（1796）頃には版木を売却するなど、苦境に陥る。

そんな中、希望は店の若者たちであった。17歳下の曲亭馬琴と15歳下の十返舎一九である。馬琴は京伝の弟子として修業しつつ重三郎のもとで出版を学び、後に黄表紙や読本を出版。一九も店の仕事をしながら才能を認められ、作品が刊行された。重三郎は、2人が葛屋の出版事業の新しい柱になる時を夢見たであろう。しかし重三郎は寛政8年（1796）に脚気を患い、同年秋には症状が悪化した。経営の疲弊も重なり、翌9年（1797）にその生涯を閉じた。

葛屋重三郎は、まさに「江戸のメディア王」と呼ぶにふさわしい多彩な業績を世に残した。重三郎が送り出した出版物は、当時の江戸文化を理解する上で欠かせない貴重な遺産となり、いまなお私たちに新たな発見と知的な刺激を与え続けている。



二代目嵐龍蔵の金貨石部金吉
東洲斎写楽 筆

（にだいにめあらしりゅうぞう かねかししいべきんきち）
出典：ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)

主要参考文献…「葛屋重三郎と田沼時代の謎」安藤優一 著
文…木下直也

金井遺跡群

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 資料部長 小島 敦子



1 現在の金井東裏遺跡

説明版



2 北側の駐車スペースから高架下を望む

駐車スペース

はじめに

金井遺跡群は金井東裏遺跡・金井下新田遺跡の総称で、群馬県渋川市金井にあります。榛名山北東麓、吾妻川右岸の河岸段丘上に立地し、六世紀初頭に起きた榛名山「ツ岳」の噴火による火山灰や火砕流で覆われた集落遺跡です。当時の噴火口からの直線距離は約8kmで、周辺には黒井峯遺跡や中筋遺跡など六世紀の榛名山噴火の被害を受けた古墳時代の集落が点在しています。

金井遺跡群の調査

平成二十四年（二〇二二）から令和元年（二〇一九）、上信自動車道金井バイパス・渋川西バイパスの建設に伴い、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を行いました。調査では、五世紀後半から六世紀初頭までの集落や古墳が確認され、被災した人々をはじめ、網代垣で囲まれた「囲い状遺構」や、複数の祭祀遺構、鍛冶工房などの生産遺構と、それらに関わる膨大な量の遺物が出土しました。なかでも甲を着た状態で被災した人物の発見は、大きな反響を呼びました。

金井遺跡群で被災した人や馬

金井遺跡群では火山灰が降った後、人々が馬を連れて避難する多くの足跡が残されています。

た。さらに、避難している最中に発生した火砕流に被災した六人の古墳人と三頭の馬が発見されました。

六人のうち、金井東裏遺跡でみつかった「甲を着た古墳人」は、推定年齢四〇歳代、推定身長一六四cmの男性で、渡来系の特徴をもった顔立ちでした。甲は、推定千八百枚もの小札を絹の組紐で綴じた優品で、緒に出土した道具や武器は古墳の副葬品と比べても遜色のないものであり、この人物が地域首長であったと考えられます。「首飾りの古墳人」は、推定年齢三〇歳代の推定身長一四三cmの女性で、管玉の首飾りをしており、東日本の古墳人に多い特徴をもった顔立ちでした。

また、金井下新田遺跡でみつかった二人は八歳と十二歳の子供で、そばには馬三頭もみつかりました。メスの成馬と性別不明の子馬が含まれており、当時行われていた馬の飼育に子供が関わっていたことが推定されています。

朝鮮半島系の文物と集落

金井遺跡群では、馬の飼育の痕跡だけでなく、鉄器を生産する鍛冶工房、ベンガラを丸めた赤玉、鹿角の加工品、須恵器やガラス玉などの渡来系の資料が出土しました。また、国内では例のない鹿角製小札の甲冑付属具や、希少な鹿角製装具を伴う鉄鎌、銀や鹿角の飾りをもつ針とともに

に、鹿角装刀子の出土が注目されています。

金井東裏遺跡でみつかった二基の古墳には、渡来系の素環頭大刀、提低石が副葬され、埋葬施設が朝鮮半島に類例の多い形式であることから、金井集落と朝鮮半島や渡来系の人々との強い関係性を見出すことができます。

豪族居館と祭祀

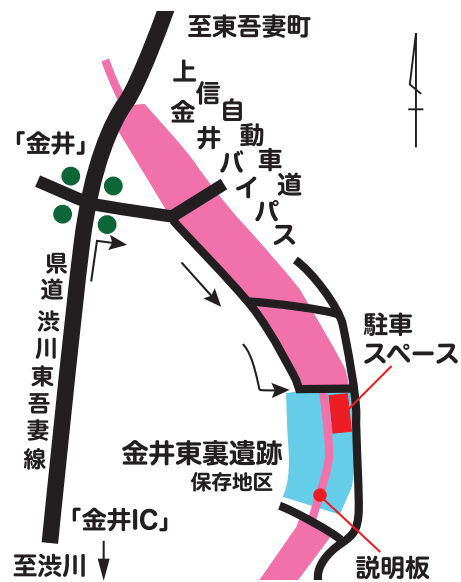
金井下新田遺跡では、「囲い状遺構」と呼ぶ高さ三mの網代垣で囲まれた二辺五〇mの方形区画遺構が発見されました。遮蔽性の高い垣で囲まれた内部には整然と建物が配置されており、古墳時代の「首長居館」と考えられます。調査では、火山灰が降る直前に、建物の解体が始まっていたことがわかりました。「甲を着た古墳人」もこのような居館に住んでいたと思われるが、噴火の時には、別の場所に新居館に移っていたと推定されます。

出土品が国重要文化財へ

このように、金井遺跡群出土品には、有力者の存在、祭祀・生産活動、朝鮮半島と関わりを示す資料が豊富に含まれ、それらによって六世紀初頭における古墳時代集落の様子を具体的に示すことができる点に重要性があります。このことから、令和七年九月二六日に国の重要文化財に指定されました。その数二八〇一点。重要文化財に指定された出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターと県立歴史博物館の特別収蔵庫に保管され、二部は展示されています。

遺跡へのアクセス

現在、遺跡は上信自動車道金井バイパスの高架下に一部が埋め戻されて保存されています。渋川市街地から県道35号渋川東吾妻線を北に向かって行くと、金井バイパスとの交差点に「金井IC」の信号があります。その北二つ目の「金井」信号を右へ曲がり、二つ目の高架を左にくぐって細い道路を少し行くと、高架の脇に駐車スペースがあります。（写真②）そこから南に歩いて行くと、甲を着た古墳人や大型祭祀がみつかった地点に説明板が立っています（写真①）。周辺道路はとも狭いので、車の通行には十分注意してください。



5 国重要文化財指定品 甲を着た古墳人の装具



3 金井東裏遺跡 甲を着た古墳人



6 国重要文化財指定品 首長居館の出土品



4 金井下新田遺跡 被災した子供と馬

坂本幸重

美術研究家 染谷 滋

生と死を見つめた感性とテクニク

《鮭》の受賞で美術界を驚かす

東京の山種美術館は、群馬県吉井町（現在は高崎市）出身の実業家、山崎種二が収集した日本画のコレクションを核として一九六六（昭和四一）年に開館した日本画専門の美術館である。その山種美術館が若手日本画家の発掘と育成を目的に一九七一年から開始した山種美術館賞展は、隔年で一九九七（平成九）年まで一四回開催され、多くの注目すべき作家を紹介してきた。その第二回展で大賞を受賞した作家が、今回紹介する坂本幸重である。

二匹の鼻曲がり鮭が新聞紙の上に載せられた受賞作《鮭》は、鱗の一枚一枚、新聞紙の細かな文字に至るまで描写され、その迫真の写実表現で美術界を驚かせた作品だ。それまでに日展などで入選を重ねて来てはいたが、一般的には無名に近い当時三七歳の作家の衝撃的なデビューであった。私がそれ以上に驚いたのは、その作家が群馬県玉村町に在住していたことだった。

熊本から群馬までの道のり

坂本幸重は一九五四（昭和二九）年一月三〇日に熊

本県菊池郡合志に生まれた。現在は合志市となっていて、熊本市の北部ベッドタウンとして人口は増加傾向にあるという。

坂本は早くに両親と別れ、祖父・祖母に育てられた。合志中学を卒業して兵庫県の製鉄会社に就職したが、三年間は高校に通わせてくれて、まだ本格的な仕事はしなかったようだ。いよいよ工場勤務が始まると、坂本は早々と会社を辞めてしまう。仕事で自分に合わないと思うと決断は早い。いかにも「肥後もつす」らしい意志の強さだ。

十九歳の夏、沼津の母親の元に居たとき、たまたま東山魁夷の小さな画集を手に取り、絵の世界に心を奪われた。大阪と東京の予備校に通って絵を学び、東京藝大を受験したが落ちた。それでも坂本は絵の道をあきらめなかった。

その一方で坂本は早くから死への恐怖と戦っていた。父親が早くに亡くなり、育ててくれた祖父も坂本が二十歳のときに事故で急逝した。次は自分の番だという思いが、坂本を苦しめた。

一九八〇年に日春展と日展に入選した頃から、坂本の画家としての人生が始まる。翌年、日展の評議員

だった川崎春彦に弟子入りにすることになり、同門の仲間たちとグループ展に参加するようになった。やがて結婚。前述した山種美術館賞展への出品のチャンスが来ると、自信と絶望が交差する中、坂本は初めて絵を描くことだけに集中する一カ月を経験した。作品の搬入を終え、その直後に以前から準備していた計画で群馬へと移り住んだ。

軌道に乗った画家人生

一九九（平成三）年、引越したばかりの玉村町の新居に電話があり、「坂本先生」と呼ばれて大賞を告げられる。半信半疑で折り返し確認の電話を入れたほどだった。この日から、坂本の人生は一変する。画商の注文を受けて絵を描くという生活が待っていた。

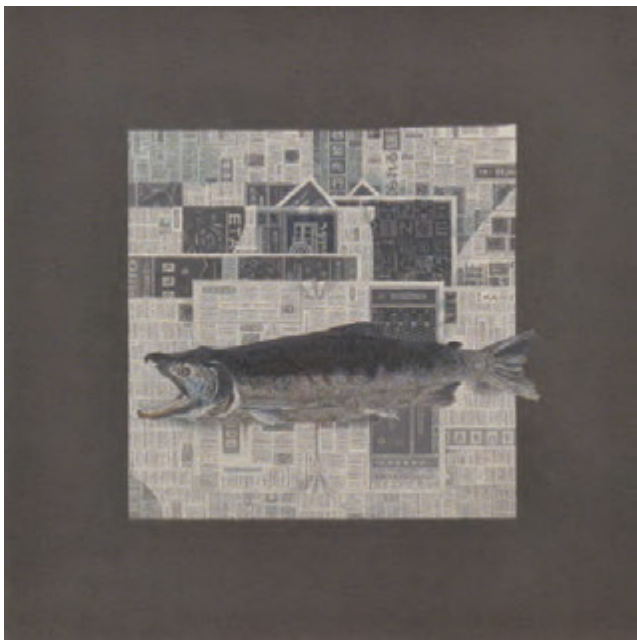
翌年には五島記念文化財団（現在の東急財団）が選ぶ美術新人賞も受賞し、その助成で一年間の海外留学も経験した。イタリア・フィレンツェでの収穫は金箔の使用だった。それまでの黒を主とした作品から、鮮やかな色彩と金箔による作品が登場するようになる。

朝日での「可視」展へと続いている。

二〇一〇年には遅ればせながら県展に初出品して知事賞受賞。翌年には山崎種二記念特別賞を受賞した。二〇一五年からは高崎高島屋で定期的に個展を開催するようになった。

二〇一九年から翌年にかけて開催された高崎市タワー美術館の企画展「トップランナーⅢ」では、県内で活躍する日本画家四人が取り上げられ、文字通り群馬の日本画壇を牽引する存在として坂本が紹介されている。

前橋では初めてとなる（株）ヤマトでの今回の個展は、あらためて坂本幸重の存在を知らしめる展覧会となるに違いない。



鮭 2016年

略歴 坂本幸重 YUKISHIGE SAKAMOTO

- 1954 1月30日、熊本県菊池郡合志（現在の合志市）に生まれる。
 - 1972 兵庫県立青雲高校卒業。その後、熊本、大阪、岡山、沼津、東京などを転々とする。
 - 1980 第15回日春展に初入選。
第12回日展に初入選。
 - 1981 川崎春彦に師事。
 - 1991 第11回山種美術館賞展で《鮭》が大賞受賞。
 - 1992 五島記念文化賞で美術新人賞受賞。
 - 1993 五島記念文化財団の助成による海外研修でイタリア・フィレンツェに滞在。
 - 1994 第26回日展で《異国の街で》が特選受賞。
 - 1997 第29回日展で《宙》が再び特選受賞。
 - 2003 第35回日展で初の審査員（同'09,'12,'17,'21）。
 - 2004 第36回日展で会員推挙。
 - 2009 前橋・詩季画材で新春企画展。以後'19年まで毎年。
 - 2010 第61回群馬県展に初出品し知事賞受賞。翌年より準会員。
 - 2011 第62回群馬県展で山崎種二記念特別賞受賞。翌年より会員。
 - 2013 第45回日展で評議員推挙。
 - 2015 高崎高島屋で個展（同'18,'21,'25）。
 - 2019～20 高崎市タワー美術館「トップランナーⅢ」に12点出品。
 - 2020 前橋・ノイエス朝日で可視展。以後毎年。
 - 2023 母校の合志中学校に恩師の親族より《鮭》が寄贈される。
 - 2026 （株）ヤマトで「坂本幸重展」開催。
- 現在、日展特別会員、群馬県美術会常任理事。

関東学院大学ラグビー部

リーグ戦1部で奮闘

関東学院大学(神奈川県横浜市)ラグビー部は、2025年9月15日に熊谷スポーツ文化公園ラグビー場で行われた関東大学ラグビーリーグ戦1部の初戦で、前年の優勝校・大東文化大学に快勝しました。

関東学院は大東文化のディフェンスをかわしトライを重ね、前半を31対14とし、後半も追いつける大東文化を引き離し、9トライをあげ55対35で勝利しました。関東学院は前年最下位だったものの、見事に前年優勝校を打ち破り、往年の強豪校としての輝きが蘇る一戦となりました。

(株)ヤマトは、スポーツ・文化振興の一環で、チームスポンサーとして関東学院大学ラグビー部を支援しています。

(広報室 木下記)



ユニフォームにヤマトのロゴを掲出



町田社長(右)と板井相談役(スポンサー契約締結式にて)



白熱した試合

全国大学ラグビーフットボール選手権大会は、大学ラグビー日本一を決定する競技大会で、関東大学リーグ戦1部の上位3校が出場できる。また、早稲田大学、帝京大学などが所属する関東大学対抗戦Aグループ上位3校、関西大学リーグ戦上位3校など合計14チームが出場できる。毎年1月に準決勝、決勝が国立競技場などで行われ、冬の風物詩となっている。

INTERVIEW

板井良太ラグビー部相談役(元監督)
榎本淳平ラグビー部監督



榎本監督

板井相談役

当校ラグビー部は1960年に同好会から部に昇格し、1974年に春口廣監督が就任してから実力を蓄え、1997年から10年連続で全国大学ラグビーフットボール選手権大会に出場、優勝6回を誇る強豪校となりました。その後低迷期がありましたが、当部の特色やスタイルに共感していただき、有力な留学生の加入や、高校訪問、OBからの紹介もあり、2023年に関東大学リーグ戦の1部に昇格した後、戦力は充実してきました。当校のラグビーは個性を尊重するスタイルで、スピード感があり観戦して楽しいラグビーを実践しています。これから数年先を見据えた時、今年は重要な年となります。

(2025年10月20日取材)

群馬グリーンウイングス

ヤマトスポンシャルマッチを開催

群馬グリーンウイングス(バレーボール大同生命SVリーグ女子)のホームゲーム初戦2025年10月18日(土)にヤマト市民体育館前橋で行われました。当社は群馬グリーンウイングスのオフィシャルスポンサーで、この試合はヤマトスポンシャルマッチとして開催され、来場者数1743人で過去最高記録でした。

試合開始前のセレモニーでは、町田社長にゲームパートナーのエンブレムが贈呈されました。また、来場者先着500名に応援用のTシャツ、来場者全員に選手名が掲載された応援ハリセンのプレゼントがありました。



町田社長にスペシャルマッチのエンブレムが贈呈されました。

対戦チームは日本代表選手を複数擁し、昨季準優勝のNEC

レッドロケッツ川崎でした。ウイングスは競り合うセットもあったものの、ストレート負けを喫しました。第3セットでは5連続得点を奪って一時は逆転に成功し、互角の戦いを見せてくれる場面もあり、ウイングスファンを沸かせました。

試合終了後は町田社長より、勝者となったNECレッドロケッツ川崎の代表選手に花束が贈呈されました。ウイングスの選手はコートを一週し、ファンの声援に応えました。

ウイングスの昨シーズンは5勝39敗で最下位と残念な結果でしたが、今シーズンは10勝6敗(11月30日現在)と健闘しています。外国人選手の加入で攻撃力が高まり、さらなる白星の積み重ねが期待できます。

(広報室 木下記)



熱戦が繰り広げられたヤマト市民体育館前橋



緑色のTシャツで応援



強豪チームに挑むウイングス



勝者チームの代表選手に花束を贈呈する町田社長